論　文

アク・ベシム遺跡の大雲寺址出土瓦に見られるソグド文字銘文について
―帝京大学文化財研究所 2025 年春の調査から―

吉田　　豊※・山内　和也※

※　帝京大学文化財研究所

要旨[1)]

帝京大学文化財研究所は2016年以来キルギス共和国のアク・ベシム遺跡で発掘を行っている。この遺跡はイスラム化以前のソグド人の都市Suyabに比定され、唐の時代の679 ～ 719年の間、その東側に隣接して砕葉鎮城が建設されていた。そして692年頃，その中に官立の仏教寺院である大雲寺が設置されていたことが知られている。2024年の調査で、大雲寺が建っていた地点を特定することができた。2025年春のシーズンにはその場所を発掘し、大量の瓦の破片を回収した。瓦には中国の技術で還元炎焼成した灰色の瓦と、還元焼成していない淡い赤レンガ色の瓦の２種類あった。そのうち赤茶けた瓦の一部には，焼成前に線刻した線画や銘文が見つかった。銘文にはソグド文字によるものとブラーフミー文字によるものがあった。残念ながらどちらも零細な断片で、内容の解明は難しい。類似の瓦は1939年のA. N. Bernshtamの発掘でも見つかっていた。

キーワード：シルクロード，アク・ベシム遺跡，ソグド語銘文，ブラーフミー文字銘文，大雲寺

はじめに

帝京大学文化財研究所（以下では文化財研究所と略す）は2016年度以来キルギス共和国のアク・ベシム遺跡において発掘調査行っている[2)]。従来の研究で、アク・ベシム遺跡は玄奘が素葉と呼び、漢文史料で砕葉と表記された都城の遺跡であることが明らかにされている[3)]。ここには679年に唐の安西都護府治下の安西四鎮の一つの砕葉鎮が設置され、中断を挟みながら719年まで存続していたことが知られている[4)]。遺跡は西側に台形状の中央アジア式の都市遺跡、その東側に変則的な五角形の城壁に囲まれた区画があり、その区画の中央に南北に長い長方形の内城があった。変則的な五角形に囲まれた区画はかつてラバドと呼ばれていたが、現在では、台形状の都城址は第１シャフリスタン、五角形の区画は第２シャフリスタンと呼ばれている。第２シャフリスタンがカバーする区域は、1970年代に耕地化するために地表に残っていた遺構はごく一部（東壁と南壁の一部）を除いてほぼ完全に削平され、2016年当時は農耕地として利用されていた。文化財研究所は削平以前に作成された地図や航空写真、衛星写真をもとに、かつて存在していた内城の位置を確定し発掘を行った。その結果、中国式の瓦や中国風の庭園跡が発見され[5)]、第２シャフリスタンこそが、漢文史料で王方翼が679年に五旬（50日）で城壁を完成させたとされる[6)]、砕葉鎮であることが明らかになった。つまり、玄奘が西突厥の葉護可汗に会いに来たという素葉城は、第１シャフリスタンであって、唐の西域経営の一環として、その東に隣接する区画に砕葉鎮城を新たに設置していたことが明らかになった。

その砕葉鎮について、タラス戦に従軍した杜環による『経行記』の逸文に、「昔交河公主所居止之處、建大雲寺、猶存」とあり[7)]、ここにも則天武后が設置した官寺である大雲寺が置かれていたことが知られていた[8)]。その大雲寺がアク・ベシム遺跡に存在するのか、存在するとすればどの遺構がそれなのかは未解決の問題であった。1953～1954年にL. R. Kyzlasovが第１シャフリスタンを発掘したときに、第1シャフリスタンの西南の外側に仏教寺院遺跡を発見しており、一時はそれが大雲寺の遺構であると考えられていた。その後1961年には第１シャフリスタンの南東の外側に、別の仏教寺院址も発見され第2仏教寺院と呼ばれた。しかしながら、この二つの仏教寺院には中国仏教の要素を認めにくく、それらを大雲寺の遺構とすることは困難であった。

このような状況で本稿の執筆者の一人である山内は、文化財研究所が2016年に発掘調査を始める以前から、後に第２シャフリスタンと呼ぶことになる区画が、唐の砕葉鎮の遺跡であると確信しており、1939～1940年にA. N. Bernshtamが試掘し、中国風の瓦葺きの遺構が発見された区域を大雲寺の遺構であると推定していた。なお文化財研究所では、Kyzlasov以降アク・ベシム遺跡で発掘されてきた遺構を連続する番号で整理している。例えば第１仏教寺院はAKB-1区であり、1996～1998年にエルミタージュ博物館のG. L. Semenovのチームが発掘した第２キリスト教教会はAKB-8区、第２シャフリスタンの内城はAKB-15区のように呼んでいる。[9] そしてBernshtamが試掘した区域については、番号が付けられていなかったことから、この区域をAKB-0区と呼び、同様にこの仏教寺院を第0仏教寺院と呼んでいる。その後、削平され耕地となった区画の中に、古い航空写真などをもとにAKB-0区が存在した場所を特定することに成功し、2024年度から文化財研究所と龍谷大学のチームはその場所の発掘を開始した。2024年度の段階で、確かにその場所に建築遺構が存在することを確認しただけでなく、中国風の石製の蓮華座の断片などを発見した。この新たに発掘している地点を、現在はAKB-0区と区別するためにAKB-20区およびAKB-21区と呼んでいる。AKB-0区に北接する区画がAKB-20区である。AKB-0区、すなわち現在のAKB-21区の内部は、さらにa~dの区画に区切って発掘を進めている。

Ⅰ．銘文について

文化財研究所が2025年４月から５月にかけて実施した発掘では、前年度からの継続でAKB-8区, AKB-15区, AKB-21区の３箇所で調査が行われた。本稿では、AKB-21区で発掘された瓦および陶器の破片に書き込まれたソグド文字の銘文について報告する。ただし龍谷大学のチームが発掘した陶片に書かれた、ソグド文字の墨書は本稿では扱わない。また平瓦の破片には人の顔や弦楽器のような線画が描かれたものも見つかっているが、それらも本稿では扱わない。

ソグド文字が刻まれた陶片は計３点確認された（下記の2025 図1 A ～図3 C）。ソグド文字は５世紀後半以降、縦書きされていたことが知られているので、[10] 本稿では縦書きされていたことを前提にしてソグド文字の上下左右を決めている。

A＝AKB21d 2025 EA 1 PL.1 n C93（図1）：ソグド語

出土品に与えられた略号は、当該の遺物がAKB21地点のd区画で、2025年に発掘されたもので、出土したのは発掘地区（**E**xcavation **A**rea）1にある基壇（**Pl**atform）1の北側（**n**orth）で見つかり、その発掘コンテクストは（**C**ontext）93であったことを示している（以下同様）。

調査団が「赤瓦」と呼ぶ淡い赤レンガ色の瓦（この「赤瓦」については後述参照）のうちの、丸瓦（完形であれば、直径14cm程度、長さ36cmほどと推定される）の破片で、破片の最大長は19.5cm、最大幅は11cm程度である。丸瓦本来の左端（下端）が残っている。湾曲した瓦の凸面（つまり瓦の背中の部分）の中央部に、長辺に沿って1行、ソグド文字表記ソグド語が線刻されている。この破片には大ぶりの文

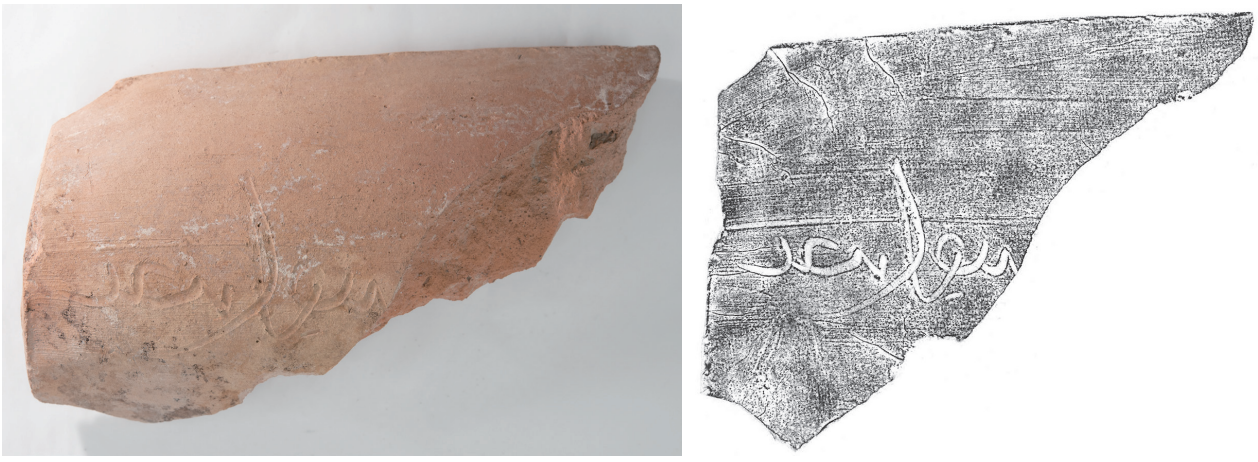

図1　A＝AKB21d 2025 EA 1 PL.1 n C93

字で書かれたソグド語の単語が２語残っている。文字は以下のように読むことができる。[11)]

[　　](x)ypδ xcy「～の所有物である」

残された２語は、二つで9cmの長さがある。破損部の銘文は15～20cmほどの長さであったであろう。そこには固有名詞が書かれていた可能性が高い。書体はソグド文字の草書体で、書体や筆遣いから判断して、手慣れた書き手によるものである。この種の書体は8～10世紀に年代比定されるソグド語文書に一般的に見られるもので、書体から年代を特定することはできない。

当然ながら銘文は焼成以前に書き込まれている。そして屋根を葺いた際に、外側から見える場所に書かれていた。その点では、文化財研究所がAKB15で発掘した丸瓦で、外側に「□懐」の文字が残されている断片と同じである。[12)]こちらは人名の一部と考えられるが、詳細は不明である。ソグド語の場合も人名を想定することは自然だが、例えば「[（この瓦は）大雲寺の）]物である」のような復元も不可能ではない。ちなみに漢語の「大雲経」に対応するソグド語形は、敦煌出土のソグド語仏典Pelliot sogdien 2の647行に残されていて、mz'yxw pr'yβ'k pwst'k「大きな雲の経典」と呼ばれている。[13)]これを参考にすれば、「大雲寺」はmz'yx pr'yβ'k βrx'rとソグド語訳された可能性が高い。銘文全体としては[mz'yx pr'yβ'k βrx'r](x)ypδ xcy「（この瓦は）大雲寺に所属するものである」を想定することになる。なお、mz'yx pr'yβ'k βrx'rあるいは、次項を参考にすればmz'yx pr'yβ'k pwstk[14)] βrx'rは、破損部のスペースに照らして矛盾はない。ただしこれはあくまでも仮説の一つでしかないことは強調しておきたい。

B＝AKB21d 2025 EA 1 PL.1 n C88（図2）：ソグド語

調査団が「赤瓦」と呼ぶ淡い赤レンガ色の瓦のうちの、丸瓦（完形であれば、直径14cm程度、長さ36cmほどと推定される）の破片で、破片の最大長は9cm、最大幅は6cm程度である。文化財研究所の櫛原功一氏によれば、瓦自体には轆轤で成形したことを示す痕跡があるという。湾曲した瓦の凸面に２行、ソグド文字表記ソグド語が焼成前に線刻されている。行の冒頭は残されているが、向かって左側の1語は語の途中で破損している。向かって右側にある２行目の1語はほぼ完結している。２行目の長さは3cmほどであり、比較的に小ぶりの文字で書かれている。この破片でも、湾曲した瓦の凸面の中央部に、長辺に沿って銘文が書き込まれていたと推測される。２行目の冒頭のさらに上方に不明の文字・記号が線刻されている。この部分は、６世紀終わりころ北インドで成立したブラーフミー文字の書体で、日本では悉曇（しったん）文字とも呼ばれるSiddhamātrikāのakṣaraのhaに似ている。

1　　'yn['k　　]「これは・・・」
2 <ha?> pwstk[　　]「（仏教）経典・・・」

図2　B＝AKB21d 2025 EA 1 PL.1 n C88

書体は草書体で、文字の外形や筆遣いから判断して手慣れた書き手によるものである。この種の書体は８～10世紀に年代比定されるソグド語文書に一般的に見られるもので、書体から年代を特定することはできない。悉曇文字も同様で、書体成立後定着し、仏典、特に密教経典で長く使われていたので、年代比定の参考にはならない。なお悉曇文字のhaは吉祥句であるhūṃを意図しているのではないかと考えられるが、ソグド語銘文との関係は不明である。

１行目の冒頭の語は不完全だが、器物に刻まれたソグド語の銘文の多くが 'yn'k～'yn'y「これは、この（器物）は」を意味する指示詞で始まっていることから、この復元はほぼ確実である。この銘文が本来どのような内容であったか全く分からない。それにしても仏教経典すなわち梵語のsūtraに対応するソグド語のpwstkが使われていることは非常に奇妙である。この瓦で屋根を葺いた建築物が、仏経教典を保管する建物（経蔵・経堂）であることを示す銘文だった可能性がまず考えられる。つまり「これは経典を保管する家である」というような意味の銘文を推定することになる。

この推定以外に、本稿の執筆者の一人である吉田は、銘文Aでも推定したように、この瓦で葺かれた建物が大雲寺であることを示す内容であった可能性を考える。大雲寺は設立当初「大雲経寺」と呼ばれていたことが知られている[15]。上述したように、大雲経がmz'yx pr'yβ'k pwst'kとソグド語訳されるなら、大雲経寺に対応するソグド語形は*mz'yx pr'yβ'k pwst'k βrx'rであったことになる。その場合銘文全体は 1/ 'yn['k krpyc[16] mz'yx pr'yβ'k] 2/ pwstk[βrx'r xypδ xcy]「この瓦は大雲経寺に所属する」と復元されることになる。憶測の上に憶測を重ねた上での復元で、全くもって確実ではないが、屋根瓦とあまりに無関係なpwstk「（仏教）経典」という語が銘文に含まれていることから、敢えて大胆な推測をしてみた。

C = AKB21d 2025 EA2 PL.1 n C112（図3）：ソグド語

淡い赤褐色の陶器の破片で、ソグド文字を書く方向から断片の上下は確認できる。破片の上方に湾曲が見えるので、壺の上部の破片であると推測できる。上下方向の最大長は5.5cm、最大幅は8.0cmである。壺の本来の大きさは不明であるが、焼成前にオモテ側に線刻されたソグド文字の銘文が2行確認できる。破片の中央部にある左側を1行目、それから相当離れて、破片の右端に行の左端がわずかに見えているもの２行目とする。この位置関係から考えて、２行目は１行目の続きではない。

1 [　　]-y 'yl '(y)t[
2 [　　](. . . . .)t[

草書体のソグド文字だが、１行目の２語目の末尾は文字 r に大きなフックを添えたウイグル文字（基本的に草書体のソグド文字と同じ文字）の l で、全体は'ylと読むことができる。これは古代トルコ語のil「国」を意味する語であろう。このようにソグド文字の草書体で書かれたウイグル語は10世紀頃のものと考えられている。ただし９世紀の初めのカラバルガスン碑文のソグド語面でも、ウイグルの可汗の

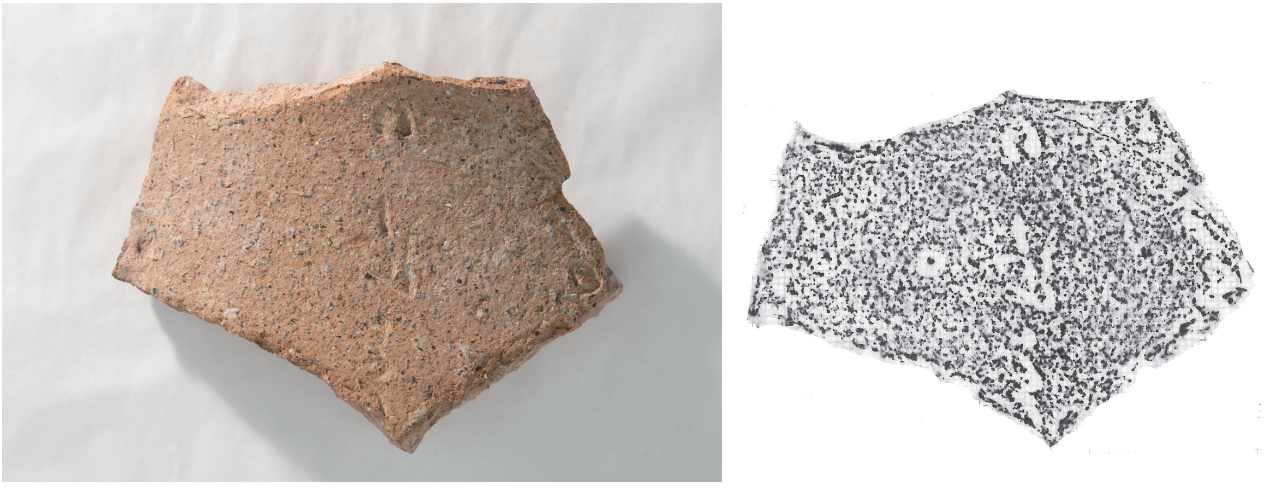

図3　C = AKB21d 2025 EA2 PL.1 n C112

名称に同じ形式の文字 l が使われていることも指摘しておきたい[17]。３番目の語はʾytと読めるが、独立した語ならば「犬」を意味するïtが考えられる。しかしそれでは意味をなさないので、ここでは先行するʾylとの組み合わせで il itmiš「国造りし」を意味する古代トルコ語の（可汗の？）人名の一部を想定してみた[18]。無論全くの憶測である。その場合ʾylに先行する語末の文字-yについては成案がない。仏寺でみつかる壺等の容器では「この容器は某の所有物である」という内容の銘文が見られるので[19]、ここでも「これ」を意味するソグド語ʾynʾyの末尾なのかもしれない。このように推定すれば、古代トルコ語の名前を持つ者がソグド語で書いた銘文ということになる[20]。

２行目については下端の t だけが読み取れる。もしも第１行と同じ内容を書いていたとすれば、[ʾynʾy](ʾyl ʾy)t[myšと読むことができようか。この復元には何の根拠もないが、文字の残画はこの復元と矛盾しない。

D = AKB21d 2025 EA 1 PL. 1 n C95（図4）：ブラーフミー文字

調査団が「赤瓦」と呼ぶ淡い赤レンガ色の瓦のうちの、丸瓦（完形であれば、直径14cm程度、長さ36cmほどと推定される）の破片で、破片の最大長は11cm、最大幅は9cm程度である。丸瓦本来の左端が残っている。湾曲した瓦の凸面の中央部に、長辺に沿って１行、非常に大きい文字のような線刻が３個確認できる。線は未焼成の段階で、指で書いたように太い。ただしどれも不完全で破片の右端のところで途切れている。３つの線刻のうち中央のものが最もよく残っている。丸瓦を縦長の状態で見ても知られている文字の形には見えないが、90度回転させて横長の状態で見ると、中央の文字とその右横の線刻の上部には短い水平の線が確認できる。これは悉曇文字のようなブラーフミー文字の特徴であり、左端の文字には、左上から右下に向かう斜線が確認され、これは母音-eをあらわすストロークのように見える。実際、類似のブラーフミー文字をBernshtamはこの同じ場所で発掘している[21]。

この線刻が３文字分のブラーフミー文字の一部であるという推定が正しいとしても、筆者には残念ながらどのような音価を持つakṣaraか分からない[22]。

おわりに

AKB-21d区で帝京大学文化財研究所が発掘した瓦には２種類存在している。還元炎で焼成されている中国式の「灰色瓦」と酸化炎で焼成されているために淡い赤レンガ色を呈する「赤瓦」である。調査団では、この赤色を呈する瓦を便宜的に「赤瓦」と呼んでいる。「大雲寺」であると推定されているAKB-21区では、この2種類の瓦が混在して出土している。この２種類の瓦は、色のみならず、製作技法、形態も大きく異なっている。詳細については今後の調査と検討が必要であるが、現時点では、灰色の瓦は「大雲寺」の創建時（692年頃か）に焼かれて屋根に葺かれたものであり、いわゆる「赤瓦」はそれ以降に屋根の修理のために焼かれたものであると考えられる。つまり、「大雲寺」は比較的長い期間にわたっ

図4　D = AKB21d 2025 EA 1 PL. 1 n C95

て仏寺として機能しており、仏寺は地元の人々（その中にはソグド人も含まれる）によって維持、管理されていたと推測される。その根拠となるのが、中国式瓦とは色も製作技法も異なる「赤瓦」とそれに残されたソグド文字ソグド語の銘文である。

ソグド文字ソグド語の銘文２点は、その赤瓦のなかの丸瓦の外側、つまり凸面の中央部分に、焼成前の段階で長辺に沿って刻まれている。これに対して平瓦の凸面には、人の顔などの絵が線刻されたものが4点見つかっている[23]。実際に屋根に葺かれた場合、文字が記された丸瓦の凸面は上面（オモテ側）とは異なり、平瓦の凸面は下面（ウラ側）となるため外から見えない状態になるものの、これらの銘文や線画は瓦職人、もしくは瓦製作の管理者の手慰みあるいは一種の落書きと見なされるだろう。

ソグド語の銘文B（AKB21d 2025 EA 1 PL.1 n C88）には、ブラーフミー文字と解釈した文字が２行目の始まりの上に書かれている。また銘文D（AKB21d 2025 EA 1 PL. 1 n C95）では、ソグド文字の銘文はないものの、大ぶりの文字らしき線刻の一部が残っている。筆者はそれもブラーフミー文字だと見なしている。この時代の中央アジアの仏教寺院に、ブラーフミー文字資料が見つかることは何ら不思議ではない。またチュー河流域では仏像に刻まれたブラーフミー文字資料が見つかっている[24]。

AKB21の発掘では他にもソグド文字資料が２点見つかっている。銘文C（AKB21d 2025 EA2 PL.1 n C112）は、壺の破片に見える銘文で、これも焼成前に線刻されている。本稿では古代トルコ語の人名の一部だと考えた。龍谷大学のチームが発見した陶片にはソグド文字が墨書されている。同じ文字列を繰り返しているので、一種の筆ならしであったようだ。

AKB21の発掘は来年度以降も行う予定であり、今後も瓦や陶器に書かれた類似の銘文が発掘される可能性が高い。このような状況では、本稿は必然的に経過報告の域を出ない。来年度以降の発掘により、新しい資料が追加されたり、本報告で提示した読みや解釈が修正されたりすることが大いに期待される。

後書き

2025年度のAKB21の発掘で見つかった瓦には、執筆者の一人の吉田の判断では、数文字であるが、ブラーフミー文字らしき文字が認められた。吉田はブラーフミー文字の専門家ではないので、本文中では、吉田の判断できる範囲で読みの可能性を指摘しておいた。別にイスラム化以前の中央アジアで見つかるブラーフミー文字では世界的権威であるドイツのD. Maue博士の意見を伺った。博士は2025年９月16日の電子メールでご意見を知らせて下さったので、以下にまとめておく。

銘文B：確かにブラーフミー文字である。文字はhaよりもhāのように見える。ソグド語の銘文との関係は不明である。なお、D. Maue博士は個人的にはSiddhamātrikāという書体の名前は使っていない。

銘文D：確かにブラー文字で３字分の上部が見えているが、残った部分がわずかすぎてどの文字かは特定できない。1文字目は全く不明。２文字目はrで始まる結合文字で、rが添えられた子音の本体はkの可能性がある。母音は、-aあるいは-u/ū。３文字目では子音文字本体は破損して不明だが、添えられた母音記号は残っていて、-eないし-īである。

Ak-Moyunの壺の銘文：2017年の夏、ビシュケクで国際アルタイ学者会議が開催されたおりに博士にお会いした際、吉田が博士の意見を求めたときには、Upagupatsya「Upaguptaの（属格形）」と読むことを提案されたが、今回は疑問符付きで、1/ u-pa-ṃ-gu-2/ ya-maの読みを提案された。

Bernshtamが発掘した瓦の銘文（『帝京大学文化財研究所研究報告』第19集、2020, p. 245図 5）：5文字確認され、左から、no. 1: khaあるいはtha 。no. 2: sa（ほぼ確実）。no. 3: ṣaあるいはba。no. 4: akṣara自体は見えないが、母音記号の-uが見えるようだ。no. 5: トカラ語表記に用いられる特別な文字のwaのように見える。

註

1）論文投稿後二人の査読者から貴重な指摘を頂き、筆者たちの誤解や初歩的なミスを訂正することができた。この場を借りて謝意を表す。むろん、論文に残る誤りは筆者らの責任である。

2）2023年度までの調査については吉田豊「帝京大学文化財研究所によるアク・ベシム遺跡（キルギス共和国）の発掘調査について」『東方学』147、2024, pp. 94-105参照。

3）「素葉」や「砕葉」の原語はイスラム史料に見られるSūyābである。この名前の語源については吉田豊「第二章　玄奘とソグド人」近本謙介・影山悦子（編）『玄奘三蔵がつなぐ中アジアと日本』京都：臨川書店、2023, pp. 33-66、特にp. 41参照。

4）唐が砕葉鎮城を維持していた時代については、齊藤茂雄「砕葉とアクベシム――7世紀から8世紀前半における天山西部の歴史展開――（増訂版）」『帝京大学文化財研究所研究報告』20, 2021を参照せよ。特に放棄の年（719年）については『新唐書』「西域伝上」を根拠として引用している。

5）この間の発掘の成果は以下の報告書で見ることができる：帝京大学文化財研究所（編『アク･ベシム（スィヤブ）2016-2017』、2022；『アク・ベシム（スィヤブ）2018』、2021；『アク・ベシム（スィヤブ）2019』、2021。

6）王方翼の事績については、柿沼陽平「王方翼攷――『旧唐書』巻185 良吏王方翼列伝訳注を中心として――」『帝京大学文化財研究所報告』20, 2021, 41-67を参照せよ。

7）齊藤茂雄「文献史料から見た砕葉城」『帝京大学文化財研究所報告』21, 2022, p. 33。

8）砕葉鎮の場合ここが再び唐の支配に帰した692年以降に設置されたことになる。

9）吉田「上掲論文」（2024）、p. 97参照。

10）この点については次の文献を参照せよ：Y. Yoshida, “When did Sogdians begin to write vertically?” *Tokyo University Linguistic Papers*（『東京大学言語学論集』）33, Festschrift for Professor Hiroshi Kumamoto, 2013, pp. 375–394；吉田豊「ソグド文字の縦書きは何時始まったか」森部豊（編）『ソグド人と東ユーラシアの文化交渉』アジア遊学 175, 東京: 勉誠出版, 2014, pp. 15–29.

11）[角括弧]は完全な破損部、(丸括弧）は文字の一部が残っている破損部を示す（以下同様）。

12）福井淳也「チュー川流域出土漢文史料の書風分析――砕葉鎮城に到達した文字」、山内和也・齊藤茂雄（編）『アク・ベシム遺跡を掘る：よみがえるシルクロードの交易都市』（アジア遊学302）、東京：勉誠社、2025, pp. 186–202。

13）E. Benveniste, *Textes sogdiennes*, Paris, 1940, p. 32参照。

14）「経典」を意味するpwst'kはpwstkとも表記される。

15）『長安志』に「大雲経寺」とある、齊藤茂雄「アク・ベシム遺跡出土「杜懐寶碑」再読」『帝京大学文化財研究所報告』22, 2023, p. 81参照。

16）ソグド語の広律の断片So 10921 recto 5に見えるkrpycが屋根瓦を意味することについては、吉田豊「ソグド語の奇妙な広律について」『内陸アジア言語の研究』40, 2025, p. 253を参照せよ。

17）この点についてはY. Yoshida, “Studies of the Karabalgasun Inscription: Edition of the Sogdian Version”, *Modern Asian Studies Review*, vol. 11, 2020, pp. 1-139, esp. pp. 25-26を参照せよ。

18）ちなみにウイグルの第2代可汗磨啜はTängridä Bolmïš Il Itmiš <Uluγ> Bilgäという名前だった。2025年9月に来日しておられた、古代トルコ語文献学の世界的権威であるP. Ziemeベルリン･ブランデンブルク科学人文アカデミー首席研究員に銘文に就いて意見を伺う機会があった。博士によれば古代トルコ語の単語に違いなく、”l-twn「金」と読めるのではないかと教示された。これも人名の要素であり得るという。専門家による交替案として傾聴に値する。

19）この機会にV. Kolchenko博士から見せていただいた、キルギスのAk-Mojunで発見されたという、ほぼ完形の壺の銘文について気がついたことを述べておきたい。胴の部分が膨らんだ徳利のような形状の壺（大きさ不明）に、草書体で縦書きのソグド語が1行2語と、その右隣にブラーフミー文字で、2行（3 akṣara + 2 akṣara）が書かれている。ソグド語のほうはywny βr'tw「これは兄弟」と読める。ブラーフミー文字の銘文の読み（Upaṃguyama?）については、後書きを参照せよ。銘文全体は「この（容器）は、同胞のUpaṃguyama(?)のものである」と翻訳できるであろう。もしかしたらβr'tw「兄弟、同胞」と読んだ語は、従来知られていない容器の名称かもしれない。その場合は「この･･･（容器）の（所有者は）Upaṃguyama(?)（である）」という意味になるのかもしれない。

20）参考までに付け加えると、タラス川の渓谷にある10世紀終わりから11世紀始めにかけてのソグド語銘文では、固有名詞（人名）はすべて古代トルコ語である、V. A. Livshits, *Sogdian epigraphy of Central Asia and Semirech'e*, London 2015, pp. 283-296。

21）川崎健三・山内和也「ベルンシュタムによるアク・ベシム遺跡シャフリスタン2の発掘調査」『帝京大学文化財研究所研究報告』第19集、2020, pp. 215-245、特にpp. 231, 245図 5を参照せよ。

22）筆者には中央の文字はbhaの上部のように見える。

23）AKB21d 2025 EA 1 PL.1 n C89：女性の左4分の3面観の顔の下半分；AKB21d 2025 EA 1 PL.1 n C91：弦楽器（？）；AKB21d 2025 EA 1 PL.1 n C94：人の顔の側面；AKB21d 2025 EA 1 PL.1 n C97：額の狭い男の顔。

24）例としては加藤九祚「セミレチエの仏教遺跡」『中央アジア北部の仏教遺跡の研究』, 奈良、1997, pp. 121-184、特にp. 184、図6–68参照。

On the Sogdian inscriptions found on roof tiles excavated from the remains of Dayunsi 大雲寺 in Ak-Beshim site
—From the spring 2025 excavation by Research Institute of Cultural Properties, Teikyo University—

Yutaka Yoshida*, Kazuya Yamauchi*
* Research Institute of Cultural Properties, Teikyo University

Abstract

Institute of Cultural Properties (Teikyo University) has been excavating the Ak Beshim site in northern Kyrgyz since 2016. The site of Ak Beshim is identified with the pre-Islamic city of Suyab. Neighboring to the east of the city the Tang Dynasty's westernmost garrison called Suye zhen 砕葉鎮, Suye being the phonetic transcription of Suyab, was established during the years 679 –719 CE. It is known that about 692 CE a state Buddhist temple named Dayunsi 大雲寺 was founded there. By 2024 the researchers of the institute had been able to locate the spot where the temple was located, and excavation conducted during the season of 2025 revealed numerous fragments of roof tiles. They are classified into two groups: one gray and the other reddish. Obviously, the former was fired in the reducing atmosphere, a technique typical of Chinese ceramics. On some of the reddish tiles one finds four inscriptions and a few drawings inscribed before burning. In this paper the inscriptions, which turned out to be written in Sogdian and Brahmi scripts, are investigated. Unfortunately, they are all too fragmentary to yield any meaningful interpretation. Nevertheless, one of the authors ventured a hazardous guess on the meaning of the Sogdian inscriptions. In 1939, a Russian archaeologist A. N. Brenshtam excavated similar roof tiles from the same spot.

Keywords : Silk Road, Ak Beshim, Sogdian inscription, Brahmi inscription, Dayun Temple